自然に穏やかに旅立っていく死を迎えるためにしておくべきこと――『「平穏死」10の条件』

長尾和宏　ブックマン社

評者　リブロ池袋本店　矢部潤子

書店の実川書ジャンル、そのなかの家庭の医学といわれる売場は、ひっきりなしに入荷する健康に関する本で常に賑わっています。小説に文学賞受賞作家がいるように、このジャンルにも注目の書き手がいて、そのときの風をうまくとらえたり、逆にお客さまがつかまえてくださったりして絶大な信頼を得、書店の店頭を潤してくれます。やはり人間、体のこと、病気のこと、また美容やダイエットなどより美しく健康に生活することへの関心が高く、〝社員食堂〜〟や〝100歳〜〟〝骨盤〜〟〝体幹〜〟等々、印象に残るキーワードが出現し、独り歩きし始めたらあっという間に一大ジャンルが出来上がり、平台を占有していきます。

そんななかで今回ご紹介するのは、新刊『「平穏死」10の条件』です。キーワードはその〝平穏死〟。

少し前に『大往生したけりゃ医療とかかわるな』という本がベストセラーになりましたが、この本は中村仁一先生という特別養護老人ホームの医師が著者で、その刺激的なタイトルと読みやすさで今年1月の発売から半年余売れ続けています。

今回の『「平穏死」10の条件』も、そのロングセラー同様、私たち自身や家族はどのように死を迎えるべきなのかを考えるきっかけになる本です（著者である長尾和宏先生は、その中村先生ともご縁があると本書で触れています）。

〝平穏死〟とは、老衰や認知症終末期、末期がんの人が死を迎えるそのときまで、平穏に生きようとすることです。著者はそのために10の条件を挙げています。「平穏死できない現実を知ろう」「看取りの実績がある在宅医を探そう」「平穏死させてくれる施設を選ぼう」など。

なぜ平穏のことと思える希望を叶えるために、条件をクリアしないといけないことになるのか。それは、病院で最期のときを迎えることが多いいまは、医師の仕事は延命することである以上、それは困難であるから。かつては当たり前だった自然に穏やかに旅立って行く死が、あるときから当たり前でなくなってきたのだと、著者はいいます。

死は個人的なものですが、死の迎えかたは社会全体のこと。生まれたときから死に向かっている私たち誰でも横並びに責任のあることだとこの本を読んで強く思います。死が身近な年代の人たちだけの問題としてではなく、自分の思うように自分を終わらせる思想を考えていく必要があるのではないでしょうか。

'95年に開業し、365日年中無休の外来診療と24時間体制での在宅医療に従事する著者。なぜ病院よりも在宅の方が穏やかに死ねるのか？　500人を在宅で看取った町医者だからいえる、満足いく死の準備とは。1400円。

一歩を踏み出す勇気をくれるお仕事小説

ともにがんばりましょう

『ともにがんばりましょう』
塩田武士
講談社　1575円

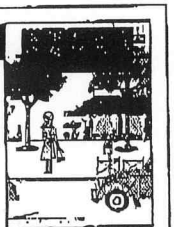
最近はお仕事小説がブームになっているが、本書は労働組合を題材にした異色作だ。

大阪の地方新聞で働く武井は、労働組合の役員に任命され、深夜手当てカットを目論む会社に立ち向かっていく。

シリアスなテーマだが、大阪が舞台だけに、ギャグとテンポのよい会話が飛び交うので、楽しく読み進められる。

生活を守るため粘り強く交渉する武井たちは、自分から声をあげ行動することの大切さも教えてくれる。

旅行気分を満喫できる珠玉の紀行小説集



『南下せよと彼女は言う』
有吉玉青
小学館　1575円

彼女の酷をしながら旅する三人組が意外な事実を知る「アムステルダムたち」、亡き妻と行くはずだったスペインを一人で旅する男を描く「南へ……」など、全7作を収めた紀行小説集。どんでん返しのある作品から男女の愛をしみじみと描くものまで収録作は幅広く、著者の確かな手腕が堪能できる。

ドイツ、イタリア、フランスなどの名所や美味しい料理も紹介されており、本書を読むと現地へ行きたくなる。

「幸福」とは何かを問うベストセラーの続編

『続・悩む力』
絶賛中
集英社新書　777円

長引く不況に、東日本大震災が追い打ちをかけた現代日本では、幸福を感じることが難しくなっている。著者は約百年前に、現代人と同じようにお金や愛、家族の問題で悩んだ夏目漱石らの言葉を引用しながら、従来のように国や会社に頼るのではなく、人と人が繋がることで生まれる新しい幸福のあり方を示す。

生まれ変わったつもりになれば新しい人生が見つかるとのメッセージは、いまこそ胸に深く刻む必要があるだろう。

人気小説家が歴史を動かした会議を描く

『清須会議』
三谷幸喜
幻冬舎　1470円

織田信長の後継者を決めるために開かれた清須会議。情と実績で味方を増やす柴田勝家と、策略を用いる羽柴秀吉が繰り広げる心理戦が、ユーモアを交えて描かれていく。

有名な武将が外来語を話すなど物語はとてもわかりやすく、歴史小説が苦手でも楽しめる。会議場での濃密なドラマは「12人の優しい日本人」を、独自の歴史解釈は『新選組！』を思わせるだけに、著者の集大成ともいえる贅沢な作品になっている。

本をプレゼント

ブックレビューで取り上げた本（漫画・単行本）を各1冊、計7人に差し上げます。（応募要項）ご希望のかたは、はがきに右の応募券を貼り、①ご希望の書名②氏名③郵便番号・住所④電話番号　を書いて、〒101-8001　小学館　女性セブン3B号「ブックレビュー」係　までお送りください。締め切りは、'12年8月13日（当日消印有効）。なお、当選者の発表は、厳正なる抽選のうえ、賞品の発送をもって代えさせていただきます。賞品の発送は8月下旬ごろの予定です。